

清田中全中参戦記 ～2年目の挑戦～

札幌市立清田中学校 高橋和也

1. チーム作りにあたって

8月に全中が終わり、「よ～し、また頑張るぞ！」と1・2年生部員も指導者も決意を新たにするものの、全中に向かって集中していた分、疲労困憊の状態は否めない(特に指導者は…)。帰札してほどなく2学期が始まる。既に他の学校は新チームを夏休み中に着々と創っている。どこと試合を何試合やって勝ったとか負けたとか、遠征をどこで行ったとか、そんな話を嫌というほど耳にする…。疲労感と焦燥感を感じつつスタートするのが、全中出場校の「チーム作りのゼロ段階」である。

全中という大舞台に立ったというかけがえのない財産があるのだから、多少のスタートの遅れをハンデと感ずる必要はない。しかし、1年生大会地区予選で敗退した代ということもあって選手も保護者も一抹の不安を抱えていた。一生懸命やった上で、負けたら負けたで仕方ない…では許されない雰囲気は清田にはある。これは伝統校の宿命。そして、さらに「自分はユニホームを着られるのか。」「試合に出られるのか。」という葛藤が子ども達に生まれる(時には保護者にも)。この辺りを整理しながら、焦らず、騒がず、地道に粘り強く練習に取り組んでいくのがチーム創りの根幹と私は考えている。

そして、その取りかかりとして、その代の「目標」を決めることから始める。これをなくしてチームの活動は始まらないと考えているからである。当然の事ながら、指導者からのお仕着せでは、選手は最後の最後で努力を投げ出す。あくまでも自分たちで作った目標であることが重要である。選手ミーティングを終えて、彼女達が出した答えは「全国制覇を目指す！」というものだった。言葉の響きが良いからではなく、全国の頂点に立つことを目指さないことには、全道で勝つこともできない。そして、「日本一」を達成できなかった先輩達に分まで頑張りたいという決意の表れだった。後は行動が伴うか、どうかである。

2. チーム作りのプラン

スタメンだった3年生5名がそっくり抜けるので、チームは一から創り上げることになる。ただし、ベンチプレイヤーが全て下級生だったこともあり、チーム内での5 on 5を通して、ある程度新チームの骨格はできていた。ビッグセンターの栗林を中心に置くことは言うまでもなく、ガードには1年生ながら3年生と共に要所要所で働いた池田。後は残りの3人をどのようにして組み合わせていくかが課題であった。

幸い、PGとして田中がすぐに頭角を現した。フォワードの延足も上背はないが、抜群の得点感覚をもっており、何試合か練習試合を行っていく中で、チーム全体で1試合あたり50～60点ぐらいは確実に取るオフェンスのメドが立った。バスケットボールは時間内に自分たちの得点以上に失点しなければ勝つのだから、後はどうやって守るかに焦点が

絞られた。9月の三連休に新十津川で行った合宿では、その大半をディフェンスに費やし、チーム力強化を図った。

その甲斐もあって、新人戦札幌予選は優勝。現状の北海道中学バスケットボール界の動向を考えた場合、新人戦である程度の結果を残しておかないと、それに伴う次の大会につながる。チームとしての実績はともかく、選手個人の実績のないチームには当然の事ながら、数々の大会に参加させ、経験をさせることが一番大事。そういう意味において、南北海道大会の出場権を獲得することができたのが全中出場の第一歩だったと言える。

3. 南大会から決戦大会、そして春までの取り組み

昨年の「全中参戦記」にも書いたが、清田中学校は生徒指導的にはお世辞にもよいとは言えない状態にまだある。その上、学力も区内で下位に留まっている。それとこれとはバスケットボールに関係ないと言う意見もあるかもしれない。時には「少し悪いぐらいでちょうどいい」という意見さえあるが、私はそう思わない。バスケットボールはネットで分け隔てられることなく、コート上で敵味方が相打つスポーツ。心の弱い人間は、多少技術と体力が上でも、競った状態になると最後は自分から崩れる。だから、部活動においても技術指導だけでなく生徒指導も当然やるのだが…。現在の私の指導力ではその成長の度合いが日頃の生活環境に左右されてしまっているのが残念である。彼女らだけが校内で隔離されて生活しているわけではないから、当然と言えば当然なのだが…。中学校であればどこでも起こりえる大小様々なありとあらゆる問題。それにプラスアルファされる出来事に1つ1つ丁寧に向き合い、解決していったのが南大会から決戦大会、そして春までの取り組みであった。

なお、南大会では苫小牧和光中学校という好チームがいることがわかり、決勝戦で自分たちが得意とするシュート合戦で敗退。これをバネに年末年始の休みを返上して練習を行い、決戦大会での再戦で雪辱することができた。この時、スタメンの延足をケガで欠いていたが、1年生の船水がその穴を埋めて余りある活躍をしてくれたのは忘れられない。チームは誰かがケガをしたからそれでお終いではなく、共に練習をしてきているからこそ、必ずその穴を埋められる選手がいるのである。

かつて厚別北でもエースのセンターが全道大会を前に負傷し、口さがない人から「もう厚北は終わった」と言われた。しかし、チーム内でのポジションを多少変更させた結果、負傷したセンターの代わりに出た選手が全道大会で大活躍。全国の切符をもたらしてくれたことがある。そのことを改めて思い出させてもらった。要は選手の頑張り、指導者の心意気なのである。

また、春までは選抜にピックアップされる選手が多く、平日以外はチーム練習もままならない。この代ではこの間の練習内容が良くなかったと個人的には猛省している。自チームに残った選手たちを、この時期にどこまで叩き上げられるか。今年の冬から春にかけてはそれをテーマにし、春先の飛躍につなげていきたい。

4. 北海道カップ、秋田遠征

高校はインターハイ、国体、ウィンターカップと3つの全国大会があるが、中学にはジュニアオールスターを別格にして、単独チームは全中というたった1回の全国大会しか経験できない。新チームが結成されてから半年以上が経ち、それぞれ学年が1つ上がって新入生を迎え、いよいよたった1回の全中に向けてのチーム作りが本格化する。

通常、新1年生にそれほど大きな期待はできないが、清田は違う。栗林の対角を務めることのできるセンター・藤原や、将来性あふれるフォワード・宗形といった他校ではあまり見られない即戦力の1年生が今年も入学してきた。また、作田昌史先生が札幌中学校より赴任。誠実な人柄でコーチングから審判、マネジメント、時には私の愚痴の聞き役まで務めてくれるという「大型補強」ができた。

あとは、年度の始まりの業務多忙に翻弄されず、学年・学級が変わってどこか落ち着かない子ども達をしっかり見守る。今まで何ともなかった子どもの突然の変化を見逃さないようにすることが大事である。その上で、まだ小学校の延長上にいる新1年生を、厳しすぎず甘やかしすぎず、環境の変化に順応させてチームに取り入れていく。新入生の言動に苛立ちを見せる上級生を説諭し、チームを軌道に乗せていくのが4月の取り組みである。

そんな中で北海道カップは開催されるが、道内3強に加え、藤浪・埼玉栄という道外の強豪とも対戦ができるという願ってもない場であった。全員が揃ってのチーム練習を再開できてから約2週間しか日がないという意見もあるが、出場することで学ぶことは多数あり、大変貴重な大会と位置づけできる。

今年は、その時点で「日本一最有力」と言われていた藤浪との対戦から多くの成果と課題を得た。途中まではいい勝負をすることができても、ちょっとした隙を突かれてあっという間に点差を離される試合展開は、前年度の若水や松山南第二と同様であった。しかし逆に言うと、これでようやく前年度と変わらない位置にまでたどり着けたという実感。そして、栗林の高さを始めとして、いくつかのプレイは前年度以上の手応えを感じることができ、「今年も全中へ。そして、今年こそ日本一！」という意識が選手の中で高まったのが手に取るようにわかった。

5月に入ると、連休を生かして秋田遠征へと向かう。去年は残念ながら震災の影響であきらめざるを得なかったが、今年は無事に行くことができた。この遠征では、よりたくましくなるために選手たちを過酷な状況に追い込む。プレイだけでなく、生活面でも洗濯も自分たちで行わせるなど、甘えを一切許さない状況で頑張らせる。

東日本選抜琴丘大会に出場するのだが、東北・北信越の好チームが集まり、熾烈極まる試合を行う。結果として、青森1位の田舎館に決勝で負けたが、タイムアウトも敢えて取らなかったのも、かなり苦しい試合運びの中、選手たちはよく頑張ったと言える。自分たちの負けるパターンを学習するのも実は大切なこと。もちろん勝利にこだわるのもよいが、それだけに窮々となってたくたくましくなることを忘れてはいけない。ただ、やはり道内で負けるのはいただけないので、舞台を道外に移して実践している。

もっとも全中で白河中央の橋本先生と会った際に「いや～、田舎館の関係者から『札幌1位に勝った！』と東北大会で随分自慢されましたよ。」と言われて、ちょっと考え直さなければいけないところもあるか…と最近は思っている。

5. 中体連札幌予選

札幌の中体連予選はかなり厳しい。もっと言うと、そう思って臨まないと簡単に足下をすくわれてしまう。実際、今回も4回戦で北白石と対戦。機動力のあるバスケットに悩まされたが、何とか勝つことができた。

また、私自身が男子の指導も女子と平行して行っているので、当然の事ながらこちらの指導にも熱が入る。正直言って、女子は何とかなるかもしれないが、男子はかなり頑張らないと次はない。変な終わらせ方はしたくない！と考えて、相当強烈に指導した。練習は男女いっしょだから、特に問題はないが、男子の大一番であった厚別中戦の後によもやの出来事が起こった。厚別に離されつつも食い下がり、最後は逆転で終わった男子この試合を、女子は次が自分たちの試合であったにも関わらず、アップもそこそこに見入ってしまったのである。結局、直後の向陵戦に敗退。決勝リーグの大事な初戦を落としてしまった。ちなみに清田中では敗戦の知らせが伝わり、リーグ戦であることがわからなかった先生方が肩を落とし、翌日応援に行く予定だったのを取りやめたそうである。

この日の夜はなかなか寝付けなかった。気持ちを切り替えるためにもさっさと寝ようと思う半面、明日、どんな事態になってもいいようにありとあらゆるシミュレーションをやっておくべきと思う気持ちもあり…。横になってはゲームプランを考え、机に向かっては電卓で計算をし、データを見比べて熟考した。最後に、子ども達に配付する部報に「人事を尽くして天命を待つ」とデカデカと書き、選手は余計なことを考えずに1試合1試合に集中しなさいと伝えることを決め、ようやく明け方に仮眠した。

翌日の北星女子戦は非常に重たい立ち上がりだったが、途中から本来の清田らしさを取り戻してスパート。貴重な1勝をあげることができた。向陵がこの時点で平岡緑に勝利したので、向陵2勝、清田と北星女子が1勝1敗、平岡緑2敗という勝敗。最終戦の結果によって、どのチームにも全道出場のチャンスがあるという状況となった。

リーグ最終戦の平岡緑戦では、栗林が大事なところでゴール下で活躍。秋田遠征後、ハムストリングを痛めていた際に徹底して行った体幹トレーニングの成果が出た。3ピリオドで粘る平岡緑からようやくリードを奪うことができ、勝利。最終的には北星女子が向陵に勝ったため、2勝1敗で3チームが並び、ゴールアベレージで優勝するという結果に終わった。指導者としてまた多くのこと学ぶことのできた札幌予選であった。

6. 中体連全道予選

今年の夏は異様に暑かった。熱中症の事故の記事が毎日のように新聞をにぎわせており、もし練習中にそんなことでも起こらうなら…という危惧があったので、15分おきに水分

補給をさせるよう心がけた。清田の体育館はミストサウナにいるかのように熱いので、機会があったら是非足を運んでほしい。暑さ対策は必要のない環境である。

ただ、全道会場は苫小牧。非常に涼しく、しかも日頃サブ会場に追いやられがちな女子をメイン会場に置くという大英断を大会本部がしてくれたおかげで、快適な日々を過ごすことができた。

また、旧知の友である駒澤苫小牧の田島先生から全面的なバックアップをしてもらい、選手が試合で力を発揮できる要素を全て揃えて試合に臨むことができた。持つべきモノはやはり気心の知れた仲間である。

2回戦からのスタートで、初戦の相手は釧路春採。前年度も釧路青陵。さらに2月にはクリニックでもお邪魔している。不思議な因縁が釧路勢とは続いているが、硬さがほぐれるのが早かった分、清田が勝利することができた。ただ、第3ピリオドでよりリードを広げようと考えて仕掛けたゾーンプレスが今イチ機能せず、この大会での試合運びに一抹の不安を感じるようになった。

3回戦の平取戦はこちらのキャリアがある分、比較的余裕のある試合運びとなったが、やはりこの試合でもゾーンプレスが今一步の仕上がりであった。2試合を通して、マンツーマンをベースに激しくない分、ファウルトラブルにも陥ることのないディフェンスで入ることがベストと考えられ、大会最終日に臨むこととなった。

全中を決める準決勝の相手は江別二。名将・吉本先生の指導で春先からグッと力をつけ、下馬評では「二中有利」の声もあるほど。札幌・石狩の距離なので、全道での対戦が逆ヤマであれば、何回も練習試合をしてお互いの力をつけたかかったほどの好敵手である。練習試合ができなかった分、吉本先生もそうだろうが、DVDを擦り切れるほどに見て対策は立てた。結局、清田の経験がほんの少しの差となり、江別二の最後の追い上げをかわして勝利することができた。ただ、江別二の存在があったからこそ、清田の子ども達も最後まで努力を忘れなかったわけで、スポーツには必ずライバルの存在が欠かせないことを再認識した。

決勝戦は苫小牧和光と4回目の対戦。地元の勢い。そして、シュートの上手な選手の多いチームをいかにして抑えるかがテーマとなる試合であった。地元の勢いに関しては、札幌ー苫小牧という距離だったこともあり、多くの方々が応援に駆けつけてくれ、男子も照れることなく懸命の応援をしてくれたので、完全アウェイの雰囲気になることはなかった。あとはシュートへの対応である。

試合は立ち上がり連続得点でいい流れを迎えることができたが、その後は和光のシュート力に防戦一方。第2ピリオドで和光の④角田の負傷と⑨島谷のファウルトラブルがなければ、南大会の時と同様に振り切られた可能性も高い試合であった。ただ、この試合では三浦が相手のエース⑤上家をよく守ったことが勝因の1つとなった。三浦は本来7～8番手で起用されることの多い選手であるが、日頃の練習において、池田がよくフェイスガードされるため、その練習台として三浦にそのマークマン役を5 on 5で頑張らせていた

のがこの試合で生きた。普段の練習さながらに上家をフェイスガードし、清田に勝利の流れをもたらした。何が幸いとなるかはわからないものだが、練習は裏切らないというのは真実だろう。

7. 全中出場権を獲得した後で

全中出場は2年連続ということもあり、出場権を獲得した後も選手に浮かれた様子はなかった。むしろ、日本一という目標に向かって、いよいよ最後の挑戦が始まるという意気込みが見られた。

昨年は出場権を獲得してから、全中に行くまでの体制(資金)作り等が大変で、対戦相手のスカウティングがほとんどできず、選手の力になれなかったことが大変悔やまれた。今回はそんなことがないように計画的に仕事を進め、スカウティングに関してはネットに出ている情報を子ども達にも協力してもらって拾い集め、ほぼ全チームのデータを整えて埼玉入りすることができた。

また、全道大会から全中までの日程が例年よりも少しあった分、インターハイから帰ってきた山の手高校にも何回も通うことができ、日本一のチーム、日本一の指導者から多くのことを学んで自信をつけることができた。これは日本中見渡してもどこの地区にもない大きなメリットであると言える。一番は、私自身が上島さんとの会話で頭の中を整理できることにあるのだが。山の手高校近くのそば屋で上島さんの話を聞きながら食べたたぬきそばの味は忘れられない。

全道の勝ちパターンで、そのまま勝てるほど全国は甘くはない。短期間ではあっても最後の最後までチームを仕上げる努力を怠ってはいけない。調整などというのはあり得ないわけで、猛練習を積んだ。特に栗林のインサイドでの使い方(アウトサイドとの合わせ・インサイドとのコンビネーション)と、全道で全く機能しなかったプレスを修正。後は前から当たられたときにいかに慌てないで運ぶかを男子相手に何度も行い、万全を期して埼玉に向かった。

千歳ー羽田間の移動は飛行機なら道内の移動よりもあっという間で、貸切バスで埼玉へ。埼玉から転校してきた田中のお母さんの伝手で上尾市内の中学校で練習をさせてもらい、山の手OGの方から差し入れを頂き、大変ありがたく思った。中学校の体育館の練習では「北海道からなら熱くないですか？」と随分恐縮されたが、清田中の体育館とさして変わらず、水道水が道産子の口には合わないので、飲み水だけが唯一心配な点であった。

中体連指定の宿舎は狭い路地の中にあるかなり年季の入ったビジネスホテルであったが、ラッキーなことに同宿は静岡の名門・常葉学園と今回優勝した宮崎県の五十市。間近で強豪校の日頃の行動を見ることができ、また同じ物を食べ、同じ場所で寝ていた選手が日本一になるのを目の当たりにできたのはウチにとって大きな財産となった。

昨年の滋賀大会は会場が狭かったため、開会式での入場行進はなし。しかし、今年は入場行進が行われ、会場の外側に所狭しと並ぶ記念品の売店と同様に「全中に来たな。」と意

識を否応なく高揚させることができた。

大会1日目、第2試合目のウチは盛り上がるコートを尻目にアップ場へと向かう。何の因果かアップ場でも隣は五十市。やはり、その取り組みを見られたのはとても良かった。コート上では、優勝候補の呼び声も高い大阪薫英が東海3位の浜松開誠館に大苦戦。考えてみると、北海道カップの時点では日本一の大本命だった藤浪が東海大会にさえ出ていないわけで、中学生のピーキングコントロールの難しさを改めて感じる。

結局、薫英は浜松開誠館に惜敗。会場中がどよめく中、コートに入り、兵庫の夙川学院と対戦する。バスケットのオールドファンなら誰もが知る名門高校の附属中学。某所からかなり綿密な情報が入っていたので、スカウティングはできていたが、いかんせんこちらの動きが硬い。決められるシュートも決められず、第1ピリオドはリードを許す。第2ピリオドに入って、バレットを投入。札幌予選からシックスマンとして活躍していた彼女の動きで逆転に成功。その後、10点差とリードを広げ始めたところで、バレットがよもやの負傷退場。この試合は何とか勝利したが、後にも先にも誤算となった負傷であった。

予選リーグを1位で勝ち抜けば、決勝トーナメントは2位との対戦となる。激戦リーグもあるので、必ずしも絶対とは言えないが、確率的には1位になることが有利なのは言うまでもない。そういう意味において、予選リーグの2試合目、関東2位の市川第七との対戦が勝負の一番だったのだが…。スカウティングとは違って、それほど攻めてこないはずの相手センターに立ち上がりから高確率のシュートで得点を許してしまう。プレスで追撃を図るも、相手にも同じように前から当たられてミスを連発。結局11点差と中途半端な負け方をしてしまい、悔やまれる一戦となった。

予選2位ではあるが決勝トーナメントの抽選会に出席。だが、同一ブロック、同一予選リーグの対戦を避ける…という規定に基づくと、たかだか予選リーグ2位の北海道ブロック代表はクジを引くことさえできず、8番目の抽選順となってしまう。つまり残りクジだけを見ることになるのである。その結果、対戦は福岡の高見。2年前の全中準優勝校である。考え方はいろいろあるが、せっかく全中に来たのなら強いところ試合できた方が良いというのが私の意見。相手が高見となれば願ったり叶ったりであった。

決勝トーナメント抽選会が終了するのが大体7時。その後9時からミーティングを行うわけで、約2時間である程度ゲームプランを明確にして、選手に話さなければならない。去年はこれが全くダメだったのだが、今年は事前の情報収集がある程度できており、しかも女子が全て同じ会場で行われていたのでスカウティングはまずまずできた。

ミーティングで確認した高見に対するゲームプランは、まずPGとして起用されている1年生はほとんど攻めてこないで、その分、他選手へのマークやヘルプをしっかり行うこと。次に175cmオーバーのツインタワーがいるが、このインサイドの合わせは先に良い形でポジション取りをさせなければ守りきれないと伝えた。オフェンスの中心はフォワードの14番。運動能力の高いこの選手が基軸となっていることを確認し、プレスやゾーン、そして全道と同様にフェイスガードを仕掛けることを確認した。

ちなみにツインセンターの1人は脇と言って、佐古といっしょに北陸高校にいた脇選手の娘さんとのこと。栗林との1 on 1は指導者であることを抜きにして圧巻であった。

試合はゲームプラン通りに進んだが、こちら栗林が3人がかりで徹底マークされる。その間隙を突きたいところだが、バレットが負傷したために、プレイイングタイムが増えた延足が疲れ気味。いつものアウトサイドからの1 on 1に切れ味がない。結果としてお互いに得点が伸びず、20-21のロースコアで前半を終える。

後半に入ると、ディフェンスの弱さというよりも、こちらの攻めのまずさから相手に走られ、点差をつけられてしまう展開に。それでも何とか食い下がり、第4ピリオドには相手のエース14番がファウルアウト。ここで一気に呵成にいきたいところだったが、池田・平野の連続3ポイントで挽回するのが精一杯で11点差で試合終了。「もっとやれた…」という思いを残して、全中のコートを去ることになった。

ちなみに、高見はその後、準々決勝・五十市戦で残り1分を切るまでリード。最後の最後で逆転3ポイントを決められて敗れたが、この試合に勝っていれば全中優勝したのではないかと思われる。いっそのこと、優勝してくれれば良かったのだが。

8. 全中を終えて

男子はともかく、北海道の女子と全国との差を感じることは多い。しかし、明らかにその差は縮まってきていると考えて良い。ただし、これで満足することなく、追いつき追い越すためにはどうしたらよいか。その答えは「心・技・体全てにおけるファンダメンタルの徹底」にある。

山の手の上島さんには、よく「北海道の中学女子は何にも習っていないに等しい」と酷評されるが、その言葉を真摯に受け止めて、ボールのもらい方1つ、パスの出し方1つをより基礎・基本に忠実に徹底させることが重要である。結局、全中という舞台ではこの差が出てしまう。「別にいいではないか…」「ちょっとぐらい…」と思えそうなところを、いかに全力でしっかり行うかが大事であるということを経験で痛感した。

池田・栗林が最上級生となって、いよいよ3年目の挑戦が始まる。しかし、会社経営でも3代目が一番難しいと言われる通り、もっとも油断や隙が生まれやすいのは承知している。池田・栗林を必死に支えた3年生が抜けた現在、1・2年生のバックアップはあまりできていない。それでいて、チーム内の精神的な成長も高くはない。元・楽天の野村監督の言葉である「精神的成長なくして技術的進歩なし」を彼女たちがこれからどれだけ理解して行動に移せるかが、次代の大きな鍵と言える。

しかし、それでも「日本一」という夢に挑む。困難な壁ではあるが、だからこそ楽しい。これから来年の8月まで試行錯誤の毎日を過ごし、ファンダメンタルの徹底を目指して頑張っていきたい。また、来年も「全中参戦記」を執筆できるように。

末筆ながらこの代の活動に際し、お世話になった方々に書面を借りてお礼を述べさせて頂きたい。ありがとうございました。今後とも変わらぬご指導をよろしくお願ひします。